
異世界物語

バクテリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界物語

【Nコード】

N7322I

【作者名】

バクテリア

【あらすじ】

「・・・君の力はこの世界では大き過ぎる」

神に言われた一言は自分でも自覚している。どうせ元の世界に居場所なんて無い。だから・・・「送ってくれ」・・・

プロローグ（前書き）

他に書いてるのに・・・

プロローグ

．．．．．

「．．．君の力はこの世界では大き過ぎる」

俺の視界には真っ白な空間があり、其所には白い髭を蓄え髪の毛が無い、詰まりハゲのじいさん、自称神が杖を持って何か喋っている。

「．．．．．」

「ハア．．．悪いが君別の世界に行ってもらふ事になるが何か望みはあるか？．．．因みに言葉や文字の心配は要らん」

望みか．．．

「．．．もう．．．．．のか？」

「なんじゃ？今何と言った？」

俺の声は相当聞こえ難いようだ。

「もう．．．元の世界に戻る事はできないのか？」

その言葉を聞いた神は申し訳なさそうにうつむきながら答えた。

「ああ、二度と戻る事はできないだろう．．．」

・・・二度とか

「なら・・・その望みは付けにしてくれないか？」

困惑した表情をする神。

「付けに？まあ良いが望みが出来たらどう儂に知らせるんじゃ？」

俺は目を閉じた。

【・・・こうやって】

「なんと！君の力がこれ程強かったとは・・・」

神は目を見開いて驚きの表情をしている。

まあ、それは仕方ないのかもしれない何せいきなり頭の中に俺の声が響くのだから。

「相手が誰か認識できていれば此くらい・・・可能かな」

「いや、儂は神だぞ！？神の頭は話掛けるなんて普通は無理じゃ・・・」

言葉を発していくうちに次第に神の声が小さくなっていく。

「俺が・・・普通じゃないから異世界に飛ばすんだろ？」

俺は苦笑いをしながら神に言うと、神はまた申し訳なさそうにうつむき。

「すまないな・・・」

「気にするな・・・どうせ元の世界に俺の居場所なんて無いんだから・・・」

自分の言っている声に自分自身傷つきながら神に言った。

「さあ、これ以上ここに居ても陰気臭くなるだけだ・・・送ってくれないか？」

神に精一杯の笑顔を見せた。

神はやはり申し訳なさそうな表情をしているが俺の言葉に頷き。

「望みは一度だけじゃなくてもいいから・・・儂ができることなら・・・」

神はそう言って杖を掲げると杖の先端が光った真つ白な空間をも染め上げるほどに・・・

光が治まると其所には神のみがいる。

「本当は君の能力を消して元の世界に居させてやれたらいいんだがな・・・」

その声は誰の耳にも入らぬまま消えていった。

第1話：能力（前書き）

なんか主人公の説明がかなり不足してますがその内話の中で説明します・・・

第1話：能力

光が治まると俺は何処かの街の大通りらしき場所に立っていた。大勢の人が買い物をしたり、話しをしたりとかなり賑わっている。

ピピッー！ー！！！！

しかしそれをぶち壊すような耳障りな笛の音が背後の方から聞こえてきた。

「コラッ！！その少年っ！！」

全く、誰を呼んでいるのやら。俺はとりあえずこの世界について調べるため歩きだす。が、

「おいっ！！何処に行こうとしてるんだ！」

後ろからそんな声を聞くと同時に俺の肩が何者かに掴まれた。振り返ってその相手を確認すると。そこには、西洋の甲冑を着た人が俺を睨み付けていた。

「おい、お前。街にムーヴするのは何処の国も禁止されている事位知ってるだろ！！」

ムーヴ？？なんだそれ？？俺が考えていると甲冑の人、面倒だから甲冑が俺が無視をしていると思い込んだらしく、

「ちっ！これだから最近の若者はっ！こっちにこいつ！」

俺は一言も発することなく腕を引つ張られて少し離れた駐在所らしき所に連れてかれた。

そして甲冑と対面する形で机を挟んで椅子に座らせられている。

「で、君の名前は？何処から来た？その前に言葉は通じるか？」

「・・・僕の名前は神宮寺しんぐうじ 彬あきい・・・です。・・・何処から来たのかは分かりません・・・」

どうせ信じないだろうから出身場所は伏せておく。

「分からないだあ？お前っ！人を舐めてんのかっ！！大体なんだその髪の毛はっ！黒色になんか染めやがって！」

甲冑は怒鳴り散らしてくる。

ちっ、うるせえ奴だなあ！この色は元からだ！

「いえっ、これは地毛・・・なんですが・・・」

「そんな訳あるかっ！この世に地毛が黒なんて奴はいねえ！」

そうか、ここは異世界だったんだっけな・・・。

もう甲冑に話す事も無いし、俺の特徴を紹介するか。まず髪の色は先程言っていた通り黒で目の色は・・・一応黒色だ。年齢は18歳、身長は170で体重は60だっけ。で、見た目は悪くないと思うけど雰囲気は・・・暗いかな。そして、俺の元の世界に居られなかった原因である能力は・・・

キヤーー！！

とっ、盗賊だああああ――！！！！

「何っ！！もう来たかっ！！」

えっ？何？盗賊？もう来た？皆何言っただ？

「くそっ！お前！緊急事態だ。釈放してやるから逃げろ！」

帰っていいの？まあ帰る所なんて無いんだけど・・・

「くそっ！警備は一体何やってたんだ！まあ、今はそんな事はどうでもいい。装備が整ったやつから三人一組で盗賊の迎撃にいけ！」

「くくはいい！」

さっき間で俺の相手をしていた甲冑が仕切っている。

「今日中に王都から騎士団が来る筈だ！今日だけ耐えろ！！」

そう言いながら甲冑は駐在所から出て行き、他の甲冑もそれに続いて出て行った。

現在駐在所には、ポツンと残された、俺だけがいる。とりあえず、釈放された見たいだから外に出るか。

「・・・何？」

外に出るとそこは乱戦と言える程ごちゃごちゃしながら甲冑と盗賊？が戦っていた。数は盗賊50、甲冑20つてところだろうか。さすがに甲冑が数で押し負けている。

「くそっ！毎度毎度いい加減にしゃがれ！！」

甲冑から聞こえてくる声を聞くからに盗賊は良く来る見たいだな。
そんな風に呑気に考えてっていると、視界に一人の男の子たぶん十歳
位が乱戦から逃げようと走っているのが目に入った。

男の子は必死に走っているが、盗賊からは逃げきれないようだ。

「オイ！坊主どこ行こうとしてるんだ？ゲヒヤヒヤヒヤ！」

盗賊は奇声のような笑い声で男の子を追いかけて剣を振り上げた。
男の子はもう駄目だと思い目を瞑って手で頭を守る体勢をとった。

「ちっ……」

俺は舌打ちをしつつその盗賊に手をかざし、

「……燃えろ」

俺の声と共に盗賊の服が発火し、

「えっ？うつ、うあ！熱い熱い止め、うああああー！！！！」

断末魔の声を上げて黒焦げに成り地に倒れた。

その一部始終を見ていた仲間の盗賊が俺に指をさし、

「アイツだ！アイツが手をかざしたら燃えやがった！アイツは魔術
師だ！先に殺っちまえ！」

その声と同時に十もの目が此方に向き、盗賊達は武器を構えて走っ
て来る。

「・・・・・・・・」

俺は無言で向かって来る盗賊達に両手をかざした。すると盗賊達が空中10メートルほど浮いた。

「えっ？えっ？何だ？」

盗賊達は何が起こっているのか理解できない様子だ。そして俺はかざした手を握った。

ぐちゃ

それと共に盗賊と甲冑達に血の雨が降り注いだ。

盗賊達も甲冑達も何が起こったのか理解できない。だが盗賊達の顔は段々青くなつて一人二人と逃げ出す、次第に全員が武器を捨てて逃げ出す。

俺は呆れた様子で周りを見渡すと老若男女構わず死体が転がっている。

「ちっ！・・・待てよ・・・何逃げようとしてんだ？」

俺は完全にキレてしまった見たいだ。

逃がっている盗賊に片手をかざして握る。

さつきとは違い今度は盗賊達全員の足が潰れた。無くなったと言っても良いほど跡形もなく。

しかし盗賊達は未だに逃げようと手でもがく。

俺も相当キテるようだ。再び手を握る。今度は手を潰した。もう盗賊達は動く事ができずに次第に死んでいった。

第2話：理由（前書き）

近々この小説のタイトルを変えるかもしれませんが。理由は他にも同じタイトルの小説があったからです。

第2話：理由

ガタツコト、ガタツコト、

今、俺の状態は目隠しプラス手錠を付けられて馬車に乗せられている。

何故こんな状態かと言うと、説明が面倒だから振り返って思い出してみる。

~~~~~

あの俺の殺戮ショーの後、俺が服に血が付いてないか確認している中、甲冑達に囲まれて槍を突き付けられた。

「今の魔術はお前がやったのか？」

先程、俺の相手をしていた声が聞こえてくる、甲冑の数は10まで減っているが、あの声の人は生きていたらしい。  
そんな事を考えていると、

「おいっ！何か言ったらどうなんだ！」

随分お怒りのようだな。

「・・・なんで武器を向けるのですか？」

「それは・・・お前は危険性が高いからだ」

・・・やはり・・・俺は何処の世界でも変わらないな・・・

「・・・そうですか」

声のトーンを下げて喋ると甲冑達は俺が何かすると思ったのか、再度武器を構え直した。

ガチャガチャ、ヒヒーーン！！

馬の鳴き声と金属がぶつかり合う音が聞こえて来る。

甲冑達も聞こえたらしく、さっき間で俺に話し掛けて来た甲冑が仲間に武器を構えたままの状態で居るように言くと、走って門の方に向かって行く。門は50メートル程離れた所にあり、そこに甲冑がたどり着くと片膝を地に付け、頭を下げて門から入って来た人に報告？らしき事をしている。門から入って来た人は今までの甲冑ではなくもつと高級感漂う感じの鎧でマントをしている。もう面倒だから鎧は盗賊達の死体を見た後甲冑が指を差した俺を見た。そして鎧は俺の方に向かって歩いて来る、もちろん甲冑はそれを止めようとしているが、そんなの構わず俺に近づいて来る。俺の目の前に来ると甲冑達に武器を下げさせて、鎧の兜を脱いで、

「私は王国第3騎士団の団長メイル＝アーバンスだメイルと呼んでくれてかまはない。君の名前は？」

メイルの顔は何処かの貴族かと言う位整っていて髪は長い金髪だ。おっと、自己紹介か、

「神宮寺彬です」

「彬か。では彬、この殺戮紛いな事をやったのは彬か？」

殺戮紛いって、列記とした殺戮だよ。

「・・・そうですが」

「何故、こんな事をした!!」

何いきなり？

「・・・それは・・・こいつらが無差別に人を殺したから」

「他に方法があつただろ!!」

あゝ、こつゆう奴か。

「・・・無い事はなかった」

「ならどうして!!何故殺した!殺さなくても捕まえれば法律で裁けただろ!!」

・・・法律か・・・

「・・・なら捕まえていたら法律で・・・死刑になっていたか？」

「死刑?何故殺す?生きていれば更生するかも知れないだろ」

ちっ・・・

「・・・更生?お前本気で言っているのか？」

ヤバい、ちよつとキレかかってきた。

「当たり前だ！人には生きる権利がある！！」

「なら、殺された一般人の家族はどうなる。殺した本人は更生したから自由ですよって、のうのうと生きて。殺された家族の憎しみは何処に向ければいい！」

「それは・・・」

ちっ・・・法律で裁けないやつだっているんだよ・・・

「・・・もう行っていていいか？俺にはやることがあるんだ」

この世界を知るとか今日何処で寝るとか。  
そう言っつて踵を返すと、

「まっ、待て！お前は一般人なのに人を殺した！王都で判決を受けなければならぬ！」

王都？判決？まあ、王都の方が情報が入り易いし、判決は面倒だけど行っつてやるか。俺は再び踵を返した。

「王都に判決を受けに来てくれるのか？」

まあ、そう言っつ事にしとくか。

俺はメイルに向けて頷いた。

その後街を出る時にメイルは俺を拘束するつもりはなかったらしいが、さっきの甲冑が俺は危険だと抗議して結局拘束されてしまった。

~~~~~

まあこんな感じだった訳だけど拘束されても別に飯は出して貰えるから拘束位我慢してやる。

まあ、もう3日もこの状態が続いたから慣れたただけなんだけど。そう言えば・・・そろそろ着くって言ってたな。

第3話：牢屋（前書き）

誤字脱字があつたら知らせてもらえれば幸いです。

第3話：牢屋

ガタツコト、キツ・・・

ブレーキの音と共に揺れが治まる。着いたのか？

ガチャ

「着いたぞ」

やっと王都か、

「・・・僕はこれからどうなるのですか？」

目隠しをしているから、話し掛けてるのが誰か分からないが、護送して来た騎士には違いないだろう。

「確か・・・宰相か誰かが判決を出すまで牢屋に入ってもらう事になる」

牢屋？まさか！？これ以上飯が不味くなるのか！？因みに騎士団の飯は全く美味しくなかった。出された物はめっちゃ硬いパンと干し肉と水、夜だけはスープが付くが全て味が薄い。まあ保存に適してるからだと思うが俺としては勘弁して欲しい。

「あの・・・期間はどの位になりそうなんですか？」

「あゝ、今回の盗賊問題は国への依頼だったからなゝ、それに関する事だから早ければ明日にも出られるんじゃないか？」

ほっ、明日か早くて助かるな、どうせ牢屋何て何処の国でも汚くて陰気臭いに決まってる。

「さあ、行くぞ。牢屋は直ぐそこだ」

そう言つて手錠らしき物に付いている鎖をジャラジャラと音を立てて俺を引つ張つて行く。

そして階段を降りて地下らしき所に着くと目隠しを外して牢屋に入れた。

「さあ、ここで判決が出る間で居てもらふ事になるが・・・何か欲しいものあるか？」

??欲しい物？

「・・・この国の囚人は欲しい物が有れば支給されるんですか？」

「いや、ただ俺にはお前が悪人には見えなくてな、まあ暇潰しの本位なら持つて来てやるよ」

この騎士も兜を被っているから表情は見えないがきつと気の良さそうなおっさんなんだろうな。

「ありがとっ、じゃあ遠慮なく、地図を貸してくれませんか？」

「地図？」

「はい、僕は田舎育ちで街にいきなり来て今いる所すら何処だか・
・」

ちよつと苦しい言い訳か？だか今のうちに聞いとかないと聞くに聞けなくなるからな。

「なんだそんな事か、分かった。今とつて来るから待つてろよ」

そう言つて名も知らぬ騎士は牢屋から離れ行つた。

~~~~~王国執務室~~~~~

トントン

「誰だ」

「第3騎士団、団長メイルアーバンスです。カーネルでの盗賊の件を報告しに参上いたしました」

「メイルか、入つて良いぞ」

メイルは部屋の中から了承の返事を聞くと扉を開けて中に入る。

「失礼します」

中に入ると還暦を迎える程の長い髭を蓄えた年寄りが

大きな執務机に向かつている。実際はこの国の宰相、ガイルⅡBⅡ  
グレイダースだ。

「カーネル？・・・確か盗賊が出るとか言っていた街だな？で、どうなった？」

ガイルは、余り興味が無さそうに執務をこなしながらメイルに尋ねる。

「それが・・・私達第3騎士団がカーネルに着いた時には既に盗賊は全滅してまして・・・」

「全滅？あの街は盗賊から街を守れないから国に依頼をしてきたんじゃないかったか？それが何故到着前に全滅していたのだ？」

執務を中断をしてガイルは怪訝な顔でメイルに問う。

「それは・・・何処から来たのか分からぬ神宮寺彬と言う魔術師が一人で全滅したらしく・・・」

メイルの言葉にガイルは目を見開き、

「それは誠か！？」

「はい、私が直接本人に聞きました」

「で、今その魔術師は何処に！？」

メイルはばつが悪い表情で、

「一応、一般人が人を殺したと言う事で王都の牢屋に入れて、判決を待たしています」

その言葉を聞きガイルはニヤリと笑う。

「そうか、なら判決は明日城の謁見の間で行う。その魔術師に午前中に迎えが行くと伝えておけ」

その言葉を聞き今度メイルが驚きの表情をする、それもそうだろう何せ相手は一般人であるが一応人殺しだ、その人殺しを謁見の間で王と会わせると言うのだ。

「えっ、謁見に！？王がそんなの許可するはずがないでしょう！しかも相手は人殺しの魔術師ですよ！」

「構わん、王は私が説得する、それにいくら魔術師でも謁見の間には近衛騎士もいるし宮廷魔術師だって控えている。心配はいらん」

「しかし！」

「口説ぞメイル！！」

メイルはガイルの激昂にビクリと体を震わせた。

「儂が心配いらんと言っておるのだ、それを騎士のお前が口答えるな！」

「はっ！しっ、失礼しました」

メイルは頭を下げる。

「分かればいい、ではもう行け」

「失礼しました」

メイルは宰相の執務室から出て行く。

ガイル以外誰も居なくなつた執務室でガイルは再びニヤリと笑う。

#### 第4話：カード

「このダルシエナ王国ってのがこの国の名前で、こっちの国がエンバルス皇国。で、今は力が均等だがいつ戦争が開戦するか分からねえ。」

「・・・おっと、後は自分で何とかしてくれ俺は仕事に戻るから」

そう言っておっさん騎士は地下から出て行った。

「・・・この世界に来て3日間。情報の為とは言え人を騙したり自分を偽ったり・・・。俺は何がしたいんだろう・・・。今はまだ力を知られてないから・・・知られたらまた・・・」

カシャカシャ

ん？誰か来たのか？

「彬、いるか？」

メール？判決がもう出たのか？

メールは俺のいる牢屋の前で足を止めた。

「なんだ、居るなら返事をしろ」

「・・・」

「まあいい、明日の午前中にダルシエナ城の謁見の間で判決を行う」

事になった。囚人が謁見の間に入る何て今までない事だ。何かありそうだから注意しろ」

「・・・忠告か」

メールには別に自分を偽る必要はないな。友達とは全く違うが気が楽だな・・・。友達なんていた事ないけど・・・

「そう言う事だ。迎えは明日の午前中に来るからな」

それだけ言うとメールは踵を返して地下から出て行った。

謁見の間か・・・どうせ「お前がこのダルシェナ王国側に付き力を使うならお前の罪は謀反にしよう」とか言って俺を戦争の道具にしようって魂胆なんだろうな・・・バカバカしい。

そんな事を考えていると時間は過ぎて、

カシャカシャ

また、誰かが来たな・・・

「おいっ、飯を持って来てやったぞ」

この声は地図を貸してくれたおっさんの声だ。

おっさんは俺の牢屋の前間で来たが飯と言うより皿すら持っていない。

「あの・・・飯って何処に？」

「ああ？これだよ」

そう言って手に持っていた大きさが元の世界の遊○王カードと同じ位のカードを3枚俺に渡す。？？これをどうしろと言うのだ、まさかこのカードに描かれた飯の写真の様に綺麗な絵を見て腹を膨らませろと言うのか・・・拷問だ・・・

俺がそんなを考えてながらカードを見ていると。

「あゝ、スマン。お前の手錠は魔力を封じる物だったな」

そう言っただけ、俺の手からカードを取り俺の目の前でおっさんはカードから小さな光と共に1枚につき一品の飯が出てくる。出てくる？いやいやおかしいでしょ、カードから飯が出てくるはずがない。俺は口を開けておっさんの行為に驚いていると、

「ん？・・・お前まさかカードを知らんのか？」

コクリと頷く

「お前、どんだけ田舎から来たんだよ・・・てか、街にワープした時にムーヴのカードを使っただけじゃないのか？」

「・・・またムーヴ、だから何だそれ。とりあえず今はどうにかして・・・」

「もしかして、魔術師に直接魔術を掛けてもらったのか？」

コクリと再び頷く、よし乗りきった。てかやっぱり聞き間違えじゃない見たいだな、この世界には魔術が普通にあるらしい。

「直接掛けてもらえる何て運がいいのか、悪いのか。まあ、とりあえずさっきの飯の出てきたカード、これは一般的に出回ってる物で、馬車みたいな大きな物じゃなければカードの中に入れられる。ようは鞆がカードになったただけだが持ち運びが便利だから良く使われる。だが、カードの中に物を入れても中の物も時間の経過をする。つまり生物を入れといたら時間が経てば腐るって事だ。そして、さっき言ったムーヴってのはワープの魔術が入ったカードの事だ。それを使うと好きな所にワープができるが街に直接ワープすると法律に引っ掛かる。因みに、魔術が入るカードと一般の物を入れるカードは全く違うから気をつけろよ。魔術が入ったカードは一回使うと消えちまうからな。そして最後に、魔術が入ったカードを作っていいのは宮廷魔術師だけだ、もし作ったのが国にばれたら重罰が課せられるからな」

そこでカードの説明が終わり、結局飯を食った時には冷めてて美味くなかった。

## 第5話：謁見

~~~~~ダルシエナ城~~~~~

現在時刻9時位かな・・・眠い・・・。昨夜寝ようとしたら布団が煎餅布団だった、俺は元の世界ではベッドを使っていた。しかしこの世界に来て、ベッドを一度も使っていない・・・まあ、この一応犯罪者と言う状況でベッドを要求すると言うのがそもそもおかしいのだが、煎餅布団を使っただけで疲れが取れる事がない中今日はいつに増しても酷い。何故なら、牢屋の中が石造りになっていて布団を敷いても床のゴツゴツ感が伝わってきて寝ようにも眠れないし寝て起きたら身体の節々が痛い・・・と言う訳で今の俺は非常に機嫌が悪い。

と、俺の現象報告はここまでにして。現在俺はダルシエナ城にいる、と言っても今も目隠しプラス手錠の状態だが、足から伝わってくる高級感溢れる絨毯の踏み心地が何とも言えない。

「着いたぞ、この扉の中が謁見の間だ」

その声と共に目隠しが外される。そして目の前に俺の身長の倍位の両開きの扉があり傍らには人が控えている。

「さあ、ぼーとしてないで中に入れ」

背中を押され一歩前に出ると傍らに控えてた人が扉を開き俺は中に入った。

ボタン

中に入ると扉が閉められた。そして中にいた騎士が俺を挟む形で俺に付いた。何かあったら直ぐに対応できるようにだろう。

謁見の間を見渡して見るとかなりの広さで奥に階段がありその上には冠を被った王と王妃がおり側に近衛隊が控えている。階段の横にはお偉いさん方がおり壁沿いにも騎士が控えている。

「罪人よ前に出よ」

誰が罪人だ！そう思いながら止まっていると後ろから騎士に背中を押され、階段近くまで行く。

「まず、お前の名前を言え」

威圧感を出しつつ王が俺に命令する。

「・・・太郎」

とりあえず嘘をついて見る。

「嘘をつくな！！」

声を発したのは階段の横にいたじいさんだ。！！何故嘘がバレた？・
・ああ、アイツが俺をここに呼んだ奴か。なら俺を知っててもおかしくない。

「何故嘘をついた」

「そんな事はどうでもいい。王が俺をここに呼んだのは俺をこの国の駒にするためか？」

俺の言葉にさっきのじいさんが驚きの表情をしている。

「やはりか・・・バカバカしい。俺は帰えらしてもらっ

そう言っつて踵を返し歩き出す。

「待て！お前の判決がまだ決定してないぞ」

ニヤリと笑いながらじいさんが俺を呼び止める。チツ、バレたか、どさくさに紛れて出て行くつもりだったのに・・・
しょうがなく振り向く。

「お前は、一般人にも関わらず50近くの人を殺したこれは死刑に値する。この罪はどうする？もしこの国に仕えるお前の罪を許してやるか？」

ニヤニヤと笑うじいさんの代わりに王が俺の罪を言う。

「・・・俺は盗賊を殺したただけだ、ゴミ共を殺して何が悪い」

「だが、お前の殺した奴の中に一般人が入ってた可能性がある」

・・・

「今・・・何て言った・・・」

「お前が殺した中に一般人がいたかもしれないと言っただ」

「そんな筈ない！！俺は盗賊だけを殺した！！」

「なら、お前はどっやって盗賊と見分けた？」

「それは……襲いかかつて来る奴と逃げて行く奴を盗賊と考へて……」

「逃げて行く奴の中にお前に恐怖して逃げる一般人がいたら？」

-
-
-

「お前は」

・ ・ ・ うるさい ・ ・ ・ やめろ ・ ・ ・ それ以上喋るな ・ ・ ・

「一般人を殺したかもしれない」

「黙れええええええええええ！！！！！」

俺は王に向かつて走り出した。しかし階段の途中で近衛隊が立ち塞がる。俺は拘束された腕を横に薙ぎ払う動作をした。すると近衛隊は吹っ飛び壁に激突して床に落ちた。

王の下へ行き胸ぐらを掴む、その行為に王以外の家臣が「無礼だ」等と言っているが王はそれを手で制した。

「俺は一般人を殺してない！！」

「何故そう言い切れる？多くの人がいたんだろ？一般人がその中に居てもおかしくない」

「うるさい！！俺は！！」

俺は拳を振りかぶったが、ここで殴ってしまったらいけないと自制し、その場から逃げる様に消えた。

~~~~~

俺が居なくなつた後謁見の間では、

「おい、罪人はどこへ行つた!!」

宰相のガイルが大きな声で怒鳴る。

「まあ、落ち着けガイルよ」

王は落ち着いていた。

「しかし、王様! 罪人が逃げたのですよ!!」

「そうだが、奴は魔術が使えないのに消えた」

「何故魔術が使えないと?」

「手錠が魔力を封印している。なのに消えた。これは奴が何か別の力を持っていると考えるべきだ」

「別の力ですか・・・。では一応罪人が逃げたと言う事で門に厳重な警備をさせましょう」

ガイルの言葉に王は頷いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7322i/>

---

異世界物語

2010年10月10日16時54分発行